

『石は取り除かれて』(ヨハネの福音書 20章 1-18節) 2023.4.9.

<はじめに> イエスが十字架で死なれて3日目の早朝、驚きの事実がここに記されています。

I 墓へ駆けつける(1-10)

①石が取り除けられて(1-2)

イエスの葬りは安息日が迫る夕刻に慌ただしく行われました。いろいろと不備や心残りもあったでしょう。その補いをしようと、マグダラのマリアは夜明け前に再度墓に赴きます。すると墓の入口の石が取り除かれていて、急いでペテロたちにそのことを報告します。

②残された亜麻布(3-10)

知らせを受けたペテロとイエスが愛された弟子(=記者ヨハネ)も墓へと駆けつけます。墓の中にはイエスの体と頭をくるんだ亜麻布が別々に残されているのを彼らは見つけます。しかし、イエスがどこへ移されたのか分からないまま、二人は元の居所に帰ります。

③空の墓からの推察

イエスを今も深く慕う思いが彼らを墓へと向かわせました。これらの見分から、誰かが墓を破ってイエスの遺体を持ち出した、との推理が出てきます(13,15)。ただ、わざわざ亜麻布だけを残して持ち去る意図は不明です。他に、どんなことが推察できるでしょうか。

II イエスに会う(11-18)

①分からないマリア(11-15)

マリアが墓に戻って中をのぞくと、二人の御使いが見えました。「なぜ泣いているのですか」と御使いは問い、彼女は自分の推察と困惑を告げます。さらに人の気配がして、後ろを振り向いてその姿を見、問い掛けられたのに、その方がイエスだとは分かりません。

②「マリア」「ラボニ」(16-18)

「マリア」一懐かしい響きに、彼女は「ラボニ(=先生)」と返します。記憶や理解の混乱と断絶も、深い人格のふれあいが一気に埋めてつないだ瞬間です。彼女はイエスに問い直して確認もしていませんが、「私は主を見ました」(18)と力強く証言します。

③御声が響く

理解・納得できない、自分の意にそぐわない状況の中で、私たちは混乱・困惑し、神を疑い、イエスを見失いやすい者です。その雲霧を吹き払うのが、積み重ねてきた主との交わり、慣れ親しんだ御声・御言です。「今」の関係が「後に悟る」土台・きっかけとなります。

III イエスは生きておられる

①開かれた墓(1)

死者の遺体を納める墓は石で封じ、死と生を隔てます。死は忌むべき、遠ざけたい類だからです。イエスもそこに葬られましたが、神はイエスをよみがえらせました。開かれた墓はその象徴です。「死は勝利に呑み込まれた」(I コリント 15:54)のです。

②聖書のことば(9)

聖書はイエスの十字架の死と復活を予め描き、それがここに実現しました。神のことば、神の思いと計画が記され、それは着実に実現します。聖書を知るほどに神の真実を実感できます。そして、理解を超えた不思議さえもやがて実現される方だと信じるに至ります。

③イエスの御声(16)

聖書を読む、祈ることを、宗教儀式・お勤めと見られがちです。むしろ、イエスとの語らいと交わりのひとときです。人格に触れ、より理解するためには、時間をかけて、回を重ねるしかありません。その積み重ねの中で、イエスの声、思いが響くように必ずなります。

<おわりに> イエスは生きておられ、私にも語り掛け、現れてくださった、という体験が復活のメッセージです。よみがえられた主は、今も生きておられ、私たち一人ひとりに近づき、語り掛け、現れ、助け導いてくださいます。あなたは復活の主にお会いしましたか。(H.M.)